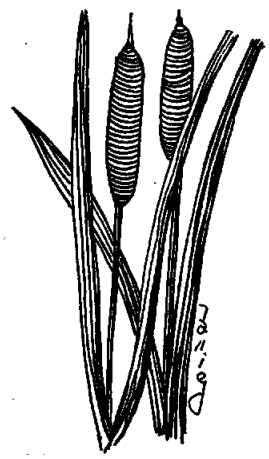
湿原の魅力

石　川　俊　夫

昭和三十八年頃、湿原生成に関係の深いスゲの権威者である秋山茂雄先生にお伴をして雨竜沼を訪れたのが、私の湿原景観に興味を持った最初である。高地の湿原は火山からほぼ平坦に流れ拡がった溶岩流の表面に造られることが多いので、火山学者にもきわめて関心深いものである。台地状地形を造る溶岩は流動性のあるもので、岩質は一般に緻密で透水度が低い。そのため、平坦面の低所にたまった水は排水され難く、湿地性植物の繁茂、枯死、埋積、泥炭化の経過をたどって、ついに美しい湿原を現出する。雨竜沼は三十九年、道天然記念物に指定されたが、暑寒別火山の東山腹八五〇メートルの高地に大小百数十個の池塘を散在し、浮島を配し、融雪時は池塘は連続して大きい沼と化す雄大な景観である。大雪山の沼ノ原、羅臼湖、知床五湖、ピヤシリ山、上川浮島、ニセコ神仙沼を中心とした魅力ある湿原も平坦な溶岩や火山砕屑岩の流動面にできたものである。

オホック海沼岸の低層湿原は地質的条件を異にし、景観も水郷的親しさを加えている。しかし、海岸に近く存しながらも昭和四十七年秋、初めて訪れた釧路湿原の壮厳な偉容は、一つの典型的なものとして深い感激を与えた。それはタンチョウの棲処や他の生物学的重要性とはかかわりなく、この湿原景観のすばらしさに打たれた直感的なものであった。どうしていままでここに来なかったのか。二十万都市に近接して、こんなすぐれた自然景観の存在が不思議に思われ、科学的な面からではない興奮であった。

低い平地にあり、とくに町に近い湿原では地域開発の波に洗われることも多い。釧路湿原も明治十七、八年以来、農地として開拓が試みられたが、泥炭地の困難な排水と劣悪な土性は農地としての利用を妨げていた。さらに地震の多い釧路地方で、泥炭層という軟弱地盤は工業立地としての条件にも不利である。釧路湿原は貴重な学術標本、すばらしい湿原景観として長く保存してのみ、世界的に生きるのである。

（会　長）